

院長のご挨拶 —2018年にあたって—

—昨年来進めてまいりました病病連携の構想が具体化し、いよいよ葛城地区の二次救急輪番を開始することになります。新年を迎えるにあたり、大和高田市立病院の本年の構想をお示し致します。



大和高田市立病院は、中和医療圏の中核病院として、如何に貢献できるかを模索してまいりました。

現在、各医療圏において、地域医療構想が検討されています。それぞれの医療圏では、背景や医療情勢が異なるため、画一的な計画を立てられないのが、地域医療構想の大きな問題であると考えます。中和医療圏の特殊性は、奈良県立医科大学（奈良医大）の所在地である一方、当院の320床以外は、300床未満の中小病院で構成されていることです。奈良医大を除く中和医療圏の病院は、医師数も少なく、1病院ですべての救急医療を応需することができません。中和医療圏の中核病院である当院も例外ではありません。そのため、病病連携を基盤として中和医療圏の救急医療をまとめられないかと、自治体や近隣の病院と協議してまいりました。中和医療圏は、人口が約37万人で、東側の橿原地区と西側の葛城地区に分けられます。橿原地区にはすでに二次救急輪番が存在するため、地域医療構想においては、奈良県で最も救急医療の遅れた、葛城地区が問題となりました。

大和高田市立病院は、以上のことから、葛城地区二次救急輪番を提唱致しました。

参加する自治体は、大和高田市、葛城市、香芝市、御所市、広陵町の4市1町です。連携病院は、土庫病院、中井記念病院、香芝生喜病院、御所済生会病院、吉本病院、大和高田市立病院の6病院です。全日制の救急輪番で、成人の内外科疾患を対象とします。時間帯は平日の当直および土・日曜、祭日の日当直を行う予定です。橿原地区の二次救急輪番とも協力し、奈良医大や救急隊の協力を得て、可能な限り「中和の救急患者さんは中和で治す」ことを目標に頑張りたいと考えております。

大和高田市立病院は、地域の中核病院として、病病連携を主導する責務があると考えております。

二次救急輪番での連携病院が基盤となることにより、在宅支援の強化も図ることができれば、中和医療圏の地域包括ケアシステムの確立に大きく貢献できるでしょう。地域包括ケアシステムとは、高齢者が“住み慣れた地域”で介護や医療、生活支援サポート及びサービスを受けられる体制ですが、そのためには、市区町村が中心となり、「住まい」「医療」「介護」「生活支援・介護予防」を“包括的に”体制を整備していく必要があります。しかし、現在は、病院側の支援が十分ではありません。病院側の支援体制を確立するために、病病連携が必要であり、またこの連携が大いに役立つと考えています。

大和高田市立病院自体は、引き続き、各診療科がガイドラインに基づいた最新の標準医療を目指しています。

研修医の教育を含め、今後も地域の中核病院としての自覚を持って、スタッフ一同邁進致しますので、ご支援を宜しくお願い致します。

平成30年1月1日
大和高田市立病院 病院長 岡村隆仁